

一、京都産業大学 公募推薦入試（国語）の出題内容

◆総論

国語は二つの大問から構成されています。
いずれの大問も文章を読んだ上で設問に答える読解問題です。

◆読解問題の設問内容

- ・ 文章……大問一は評論文あるいはやや硬めの文章、大問二は随想文あるいはやや柔らかい文章です。
いずれの文章も分量は3000字前後です。
- ・ 設問……全問マーク選択式で、漢字問題、語句の意味問題、空所補充問題、内容説明問題、理由説明問題など多岐にわたっています。

◆対策

- ・ オートドックスな出題内容なので、正攻法の対策が大切です。
- ・ 言葉の意味や文法的なルールなどに従って文章を読む。
- ・ 本文中にある根拠を踏まえて正解を選ぶようにする。
- ・ 漢字だけでなく四字熟語やことわざ、慣用句などを学び、語彙力を高める。

二. 入試現代文「読解」の基礎

(1) 基本姿勢 言葉のルールに従って文章を読もう

◆一文を正しく読むために

ひとまとまりの「文章」を読解するには、そもそも、一つの「文」の意味がわからないといけません。一文を正しく読むためには、以下のような点に注意しましょう。

★長い文では修飾語を無視し、《何(誰)が、何を、どうする(主語と述語)》を意識する。

★一文の意味が分からないとき、一文まるまるわからない、ということとは普通ない。一文の中の言葉(単語)のどれかの意味がわからないせいで、一文全体がわからなくなっていることが多い。その「わからない言葉(単語)」の意味をよく考える。あるいは文章中の他の言葉と同じ意味で使われていないかと予測したりする。

◆指示語のはたらき

「これ」「それ」「あれ」などを指示語と呼びます。「こうした」「このような」「このように」なども同じ仲間として扱ってかまいません。指示語は、ふつう前に出てきた言葉や文をさします(まれに指示対象が後ろに来ることもあります)。指示語は「つながり」を表すものであり、文章を読みつなぐための道具なので、指示語が出てきたら何を指すのかに注意して読みましょう。

◆読解で鍵となる接続詞

指示語と同様に、**接続詞は文と文や言葉と言葉の「つながり」(関係性)を示します。**有名なものをまとめたので、今一度確認しておきましょう。

名称	接続詞の例	関係性(つながりかた)	例文
順接	だから したがって ゆえに それゆえ よって など	前の事柄が原因・理由となり、その順当な結果や結論が後に来る。	彼女は努力家だ。したがって、成績も優秀だ。
逆接	しかし ところが だが けれども	前の事柄と逆になるような事柄を、あとに導く。	みんな頑張った。しかし、試合には負けた。
同列	すなわち つまり 要するに など	前の内容と同じ内容を後に導く。 (「要するに」は「まとめ」)	用言、つまり、動詞・形容詞・形容動詞は活用する。
理由	なぜなら というのも	前の内容の理由をあとに導く。	彼は立派な人物だ。なぜなら責任感が強いからだ。
例示	たとえば	前の内容の具体例を後に導く。	抽象概念、たとえば愛は目に見えない。
転換	ところで さて	話題を変える。	久しぶりだね。さて、用件を話そう。

(2) 評論の原則① 文章の「テーマ」「主張」「論拠」に注意を払って読もう

文章を読むときには、漫然と、ただただ読んではいけません。あるいは、ずっと集中して最初から最後まで読み続けても疲れてしまいます。だからこそ、メリハリをつけて読むことが大切です。そして、その時に意識してほしいのが、「テーマ」「主張」「論拠」です。

テーマ	……	文章が話題にしていること
主張	……	筆者が言いたいこと、伝えたいこと
論拠	……	筆者が主張を述べるときの理由や元になっている考え

何について、なぜ、どんなことを言いたいのか。これを理解することが、文章を理解するということの基本です。それは入試問題であっても変わりません。「評論」ではこうした点に注目することが大切です。

(3) 評論の原則② 文章中の「つながり」を把握しよう

文章は多くの文から成り立ち、文は多くの言葉から成り立っています。そして、文も言葉も、それぞれがつながり合い、ひとつの全体を作っています。文章を読むとは、この「つながり」、すなわち「関係性」をつかむことです。文章中に以下のような「つながり」関係性が隠れていないか注意して読み進めましょう。

名称	内容・表現	例
類比	AとBはXの点で似ている／同じだ	言語も絵画も何かを象徴するという点では同じである。
対比	AとBはXの点で違う AはXだがBはYだ	日本人は集団主義的だが西洋人は個人主義的だと言われがちだ。
抽象と具体	X ≪抽象的表現／一般的表現／概説≫ (たとえば) Y ≪具体的な記述／詳しい説明／具体例≫	読解では言葉の規則に従うことが有益だ。(たとえば) 接続詞や指示語をつかむと、文章が読みやすくなる。
判断と理由	Xしたがって／だから／それゆえY Yなぜなら／というのもXだから	人間とて生物として自然の一部である。だから、人間と自然を過度に対立させるのは誤りだ。
変化	XからYへ変わる	近代には理性の崇高さが信じられていたが、二〇世紀になり感性の意義が注目され始めた。

三. 入試現代文「解答」の基礎

(1) 解答の原則① 解答の根拠を本文中に求める姿勢を徹底しよう

設問に向き合うとき、大切にすべき姿勢があります。それは、《本文に根拠を求める》こと。以下では、「解答の根拠を本文中に求める」と言った時に何ができればよいのかを二つ挙げます。

① 「解答根拠はここだ！」と明言できるか

マーク式の問題を解くとき、先に設問文とマークの選択肢を見てから本文に戻って、選択肢の内容が本文に書かれているかどうかを調べる人がいます。いわゆる「消去法」というやつです。もちろん、消去法が正しく使えることは大切です。しかし、このやり方だと、時間がかかったり、ウソの選択肢に惑わされて、読解を間違えたりする危険性があります。そこで、設問を解くときには、次のステップを踏むようにしましょう。

ステップ(1) 設問文を読み、問われていることを理解する。

← ステップ(2) 本文に戻り、正解を導くための《解答根拠》を探し出す。

← ステップ(3) 選択肢を見て、《解答根拠》が正しく述べられているものを選ぶ。

正解の根拠を自力で見出すこと、これが「根拠を本文中に求めること」の一つ目の意味です。

②「二」が違う」と言うとき、どのように違うかを言えるか

次は消去法の話です。「選択肢Aは本文のここと違う」と考える。これを正しくできているでしょうか？「違う」と一言で言っても、色々な「違う」があります。本文で「配慮すべき」と言っているのに、選択肢は「無視すべき」と書かれているというふうには、**本文と矛盾／逆**なのか。また、本文で「難しい」と書かれているのに、選択肢は「不可能」となっているというように、**言いすぎ**なのか。あるいは、**本文に一切書かれていないこと**を選択肢が述べているのか。一つ一つの選択肢について、**どこが間違いか**だけでなく、「○○の点で違う」という**コメントができること**。これが、「根拠を本文中に求めること」の二つ目の意味です。

③「二」つまで絞って悩む」場合の対処法

現代文に限らず他の科目の場合も、「二つまで絞ったのに間違える」という人は多いかもしれません。どうすれば良いのでしょうか。

正答になりそうな選択肢を二つまで絞ってから悩んでしまう場合には、《選択肢と本文の照らし合わせをいったんやめて、**選択肢どうしを見比べて、違いを考える**》という作業を試みましょう。そうすると、着眼点などが見えてきて、突破口になることがあります。そのうえで、設問の要求をもう一度考えて、要求に即した選択肢を選びましょう。

(2) 解答の原則② 本文の記述の「言い換え」を見破ろう

「解答根拠を本文中に見つけた。それが書かれてある選択肢を選んだと思ったらまちがいだった……」こんな悩みを抱いている人はたくさんいるはずですよ。そして、まさにここをクリアできるかどうか、現代文で点が取れるかどうかを決めます。なぜ間違ってしまうのでしょうか。

教育の平等を達成するのが難しい現代の格差社会において、図書館は、学校教育に頼らず自力で一人前の教養と学識を身につける市民を支える「民衆の大学」とも呼ぶべき存在である。

問 次の文*は右の文章に合致しているか、していないか。

* 図書館は民衆の自己陶冶を支える。

右の問題が解けるでしょうか？ 難しいと思った人もいるかもしれません。なぜなら、*の日本語が文章とそっくりそのまま同じ表現ではないからです。もし*が「図書館は、学校教育に頼らず自力で一人前の教養と学識を身につける市民を支える」だったら、単なる視力検査になってしまいます。だから**出題者は、選択肢の日本語を、本文中の表現と似ている表現や、似ていそうで違う表現にするのです**。そこに引っかかると間違えてしまいます。

これは結局、**言い換えの判断ができるかどうか**が勝負になります。根拠を探した上で、選択肢の表現が言い換えになっているかを考えます。その際には語彙力も大切になるので、少しでも語彙を蓄えておきましょう。

(※答え……合致している 「陶冶(とうや)」とは、教養や知識を育んでいくことです)

四．入試問題演習（二〇二四年度 公募推薦入試 11月18日実施）

〔一〕次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

- 1 （注¹） ムーアは、著名な論文「外界の証明」や「a常識の擁護」、b「観念論の論駁」などにおいて、（注²）実在論を擁護し、外界について無数のことを自分は確かに知っていると主張している。たとえば、「ここに私の手がある」、「私は宇宙に飛んで行ったことがない」、「私の身体は過去のある時点から存在していた」、「地球は、私の身体が生まれる遥か以前から存在していた」等々のことだ。これらの命題を、本書ではまとめて「ムーア命題」と呼ぶことにしよう。
- 2 さて、素朴といえは素朴なムーアのこの主張に対して、（注³）ウイトゲンシュタインは次のような批判を向けている。

10 ムーアの誤りは、人はそれを知りえないという主張に、「私はそれを知っている」という言明で対抗したところにある。

- 3 ウイトゲンシュタインはムーアをそう批判することで、（注⁴）外界についての^c懐疑論の方が正しいと認めているわけではない。彼が言わんとしているのは、「ここに私の手がある」とか「地球は遥か昔から存在していた」といったことを疑うことが可能なケースを我々の生活のなかに見出すのは困難だ、ということである。

A ムーアが「知っている」と主張して列挙するのはそもそも、「知っている」「知らない」という概念自体が普通は適用されない事柄なのである。

4 ウイトゲンシユタインによれば、たとえば「ここに私の手がある」とか「これは手である」といった命題が表しているのは、何らかの根拠によってその存在が確認されているような事柄ではない。そうではなく、ここにある手をめぐって我々が様々な実践を行う際に、その前提として疑いを免れている事柄にほかならない。

ムーアが問題にした「これが手であるのを私は知っている」という命題は、おおよそ次のことを意味するのではないか。すなわち、「この手が痛むんだ」とか、「この手の方がもう一方の手より弱い」とか、「私は昔この手に怪我けがをした」とか、そのほか様々な表現を用いて私は言語ゲーム（「言葉を用いた活動」）を営むが、そのとき私は、この手の存在については少しも疑っていない、ということである。

5 ウイトゲンシユタインはこの論点を明確にするために、ちょうつがい「ドアと蝶番」という卓抜な比喻を案出している。その箇所を続けて見てみよう。

つまり、我々が立てる問いと疑いは、ある種の命題が疑いの対象から除外され、問いや疑いを動かす蝶番のような役割をしているからこそ成り立っている。

35 　ただしこれは、我々にはすべてを探究することはできないから、たんなる想定で満足せざるをえない、
　という意味ではない。B 我々がドアを開けようとするときには蝶番は固定されていなければならない、と
　いうことなのだ。

40 　[6] たとえば、この私の手について何かを疑うためには（私の手にはウイルスが付着しているのではないか、
　等々）、ここに私の手があることは疑いの対象から自ずと外れて^{おの}いる必要がある。同様に、私が今後宇宙に行
　く方法を探究したり、その可能性を疑ったりするためには、生身で宇宙に飛んで行く能力を私がついてい
　ないことは当然、いわば鵜呑みに^のされていなければならない。このことを、彼は〈ドアと蝶番〉の比喩
　を用いて表すのである。

45 　[7] ただし、この点を指摘することで彼は、「ここに私の手がある」や「私は宇宙に飛んで行ったことはない」
　といった命題——ムーア命題——は絶対確実な真理を表している、と主張しているわけではない。言い換え
　れば、いかなる状況においても常に「蝶番」の役割を果たす命題がある、と主張しているわけではない。

50 　[8] というのも、たとえば込み入った特殊な文脈を用意すれば、ムーア命題も疑いの対象になりうるからだ。
　SF的な例を考えてみよう。ある日、地球にやってきた宇宙人に私が誘拐されたとする。私はやがて解放さ
　れたが、その際に彼らからこう言われる。「我々はお前をサイボーグ化し、月まで自由に飛んでいけるよう
　にした。すでに、お前を眠らせた状態で自動運転モードの試運転を行い、成功しているから安心してほしい」。
　慌てて自分の体をチェックしてみると、全身が金属のような物質に置き換わっており、翼や推進装置らしき
　ものも付いている。おまけに、体のあちこちに焼け焦げたような跡もある。——こうした状況の下では、知

らぬ間に自分が宇宙に飛んで行った可能性を真剣に検討するのは理にかな適っているだろう。

(古田徹也『このゲームにはゴールがない ひとの心の哲学』による。)

(注1) ムーア——イギリスの哲学者(一八七三—一九五八)。

(注2) 実在論——外界が人間の意識とは独立して存在するとする哲学上の立場。

(注3) ウイトゲンシュタイン——オーストリアに生まれ、イギリスに移り住んだ哲学者(一八八九—一九五一)。

(注4) 外界についての懐疑論——外界について確実な知識を得ることはできないとする考え方。

- 問一 二重傍線部 a 「常識」 b 「擁護」 c 「懷疑」と同じ構成の熟語はどれか。最も適切なものをそれぞれ一つずつ選び、マークせよ。
- | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|
| 1 慶弔 | 2 奇遇 | 3 携帯 | 4 喫茶 | 5 雷鳴 | 6 無事 |
|------|------|------|------|------|------|

問二 波線部 A 「ムーアが「知っている」と主張して列挙するのはそもそも、「知っている」「知らない」という概念自体が普通は適用されない事柄なのである」とあるが、それはなぜか。最も適切なものを一つ選び、マークせよ。

- 1 ムーア命題が事実であることはあまりにも明白なので、疑うことなどできないから。
- 2 ムーア命題が真理であることを何らかの根拠によって確認することは不可能だから。
- 3 ムーア命題は人が普段言葉を用いて何かを行うために必要とされているものだから。
- 4 ムーア命題は我々の信念に深く刻み込まれていて、疑うことは決してできないから。

- 問三 二重傍線部 d 「卓抜な」の意味として最も適切なものを一つ選び、マークせよ。
- | | |
|------------|--------------|
| 1 とても風変わりな | 2 普通には考えつかない |
| 3 とても気の利いた | 4 他よりはるかに優れた |

問四

波線部B「我々がドアを開けようとするときには蝶番は固定されていなければならない」とはどういうことか。最も適切なものを一つ選び、マークせよ。

1 我々が何かを問う時には、その問いを可能にする何らかの命題が前提とされていることが必要であるという事。

2 我々が何かを問う時には、その問いの答えを確定するための要件が成立していると認める必要があるという事。

3 我々が何かを疑うためには、どうやっても疑うことのできない命題を確実な出発点とする必要があるという事。

4 我々が何かを疑うためには、日常生活において常識とされている命題を前提にして始める必要があるという事。

「二」次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「新潮」二月号（一九八五年）に、「溝の感触」というエッセイを（注1）平出隆氏ひらいでたかしが書いている。そこで、『詩』から『小説』へ、形式としてのジャンルのあいだの溝を跨またいだ幾人かの作家たち」とその溝の跨またぎ方について書き、『詩』を棄すてることをしないでは『小説』をはじめられなかった詩人」としてわたし自身もひきあいに出されている。

平出氏の「溝」ということばを用いれば、わたしは（注2）十五、六年前にそれを「跨またいだ」ことになるが、コトはそんなに簡単にいかなかったというのが実感である。

これまではもちろん、いまだに、なぜ詩を書かないのかと問われることがあり、いつも「アキタから」と答えてヒンシユクを買ってきた。しかし詩の雑誌や詩集で、同世代のひとのものを目にするると、「よくアキタにやれるものだなあ」というのも、いつわらざる気持きもちである。

「詩」が書かれているところは、A「一種の聖域」で、「詩」を書かない人間にはわからぬ世界である。I、新聞、雑誌等が「詩」作品を詩人に依頼して、その聖域からそれがさし出されると、それにはだれも文句をつけない。ことばづかい、行分け、句読点、意味の飛躍等が聖域外の常識から見ても、師匠筋の添削ということも起おこりえない。また、その常識は通用しないとされている。短歌や俳句のような、師匠筋の添削ということも起おこりえない。また、

新聞、雑誌等だけでなく、読者も聖域からさし出されたものには、質問できないし、文句もいえない。散文「作品」が受ける検閲、といえは大げさだが、編集者による文章上の疑問点の指摘のようなことは行われないのである。「これは意味が通りませんが」とか「この形容詞はオカシイのではありませんか」なんてことを、「詩」作品はいわれない。このように聖域でつづり合わされたコトバは「絶対」なのである。こういう「絶対」の言語作品

には昔の^(注3)勅語がある。だから当然、それへの外部からの批評はまことに困難であり、不可能な感じさえ起させる。

聖域内部では、それぞれの「作品」が「絶対」であるとはいえ、「絶対」の共通文法というべきものが生み出され、それによつて相互批評は行われる。Ⅱもともと「絶対」は唯一のものであるから、それを書いた本人以外には理解をもとめておらず、したがって、厳密な意味で相互に批評が行われるかどうかもある。ただ、「絶対」にも色あいのちがいがあるから、このちがいは聖域居住者ならわかり、おのずとそこに人気者や有力者が出てくるのは当然であろう。

(富岡多恵子『表現の風景』による。一部省略。)

(注1) 平出隆——詩人(一九五〇—)。

(注2) 十五、六年前——この文章が書かれた一九八五年から十五、六年前。

(注3) 勅語——天皇による意思表示のことば。

問一 波線部A「一種の聖域」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを一つ選び、マークせよ。

- 1 内部からも外部からも批評することが一切許されないのが、「詩」の世界であるということ。
- 2 常識的な文法が常に無視されて読者に意味が伝わらないのが、「詩」の世界であるということ。
- 3 作者による自作朗読の試みがしばしば行われているのが、「詩」の世界であるということ。
- 4 作品についての他人からの意見をなかなか受けつけないのが、「詩」の世界であるということ。
- 5 誰も添削を試みないので作品の質が下がってしまうのが、「詩」の世界であるということ。

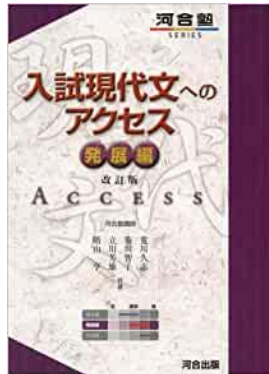
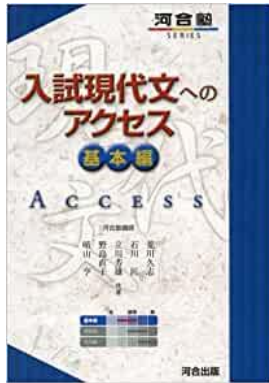
問二 空欄 I II に入るべき語句として最も適切なものをそれぞれ一つずつ選び、マークせよ。

- | | | | | | | | | | | |
|----|---|-----|---|------|---|-----|---|-----|---|---------|
| I | 1 | たとえ | 2 | ところで | 3 | ただし | 4 | だから | 5 | にもかかわらず |
| II | 1 | しかし | 2 | そして | 3 | 実際に | 4 | むしろ | 5 | なぜなら |

五. 現代文おすすめの参考書・問題集

○河合出版『入試現代文へのアクセス 基本編』『同 発展編』

『基本編』、『発展編』にはそれぞれ十六題の問題が載っています。この参考書の良いところは、文章の解説が丁寧なこと、重要な語句や現代文キーワードの解説があること、解説が丁寧で採点基準も掲載されていることです。丁寧に勉強すれば、かなりの力がつくはずで、『基本編』だけにかまいませんが、簡単だと思う人は『発展編』に取り組んでみてください。



○旺文社『大学入試 全レベル問題集 現代文①、③、④』 梅澤眞由起（著）

どんどん演習をしたい人はこれに取り組みましょう。解説も丁寧です。

①は「基礎レベル」、③は「私大標準レベル」、④は「私大上位レベル」となっています。基本的には③をやればOKですが、現代文が苦手な人は①を、得意な人や③を終えてしまつて余裕がある人は④までやってみましょう。

